

2022 年度

国 語
(2 期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 50分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

「ワビ」は文字通りの「侘び」です。すなわち「侘びる」ことである。まさに貧相や粗相をお詫びすることなのです。なぜ詫びるのかというところ、そこに頂点を用意できなかったから詫びている。その姿が「侘び」なのです。

頂点を用意できなかったというのは、「けつして上等ではありません」ということで、つまりは粗相であることです。しかし、その粗相を心から詫びてまで用意することがワビの気持ちというものであり、そこから「侘び茶」の意識が生まれたのでした。

② こんな不思議な感覚を最初につくったのは村田珠光です。それまでも侘歌・侘言・侘人・侘声といった「侘びる」という言葉は万葉時代からすでにあつたのですが、それらはおおむね繰り言のようにつかわれていて、あまりにも貧しい様子をさす言葉であつたので、とうてい美意識の対象になるようなものではなかったのです。その「侘び」や「侘びかた」を、珠光はしだいに「侘びのふるまい」にまで高めることによって、それまでにない茶振舞をつくりあげようとした。

青年時代は奈良の称名寺の僧侶であつて、そのあと三十歳ころまで諸国を漂泊していた珠光がこんなことを思いついたのは、珠光が一休文化圏のサークルの中にいたからだと思います。珠光は大徳寺の一休に参禅し、その文化圏の多彩な交友にふれ、カルチャーショックをおぼえたにちがいありません。

そこには漱石や鷗外や狩野亨吉のサークルに似て、次々に誰もが切磋琢磨されていったクラブ文化があつたのです。

(中略)

村田珠光が試みたことは、それまでは中国渡来の唐物などの道具を持つていなければろくな茶数寄ができないと思われていたところへ、たとえ名品や逸品の一物一品も持たなくとも、なんとか手持ちの道具を心を尽くして用意すれば、そこに新たな茶の心が生じるはずだという試みだったと思います。これを日本文化史における「間に合わせ」あるいは「取り合わせ」の発見だ、というふうに見るといいでしょう。

一人一人が自分で創意工夫をするアソシエーションやコンビネーションの発見でした。いまからみれば、これが特別のこととは思えないのですが、当時は「例」が君臨する時代であつて、なかなか「今」を突破できなかったものです。きつと一休のようなたくいまれな破格の僧がいたことが、こうしたトリアルを可能にしたのでしょう。

こうして「間に合わせ」でもいいのだという、とんでもなく

※の哲学がたいへんラディカルに出現したのです。

人を招くための茶の湯で充分な用意ができないなどということは、ある意味では逃げ口上になります。

それをあえて「粗相を侘びる」ということを前面に出し、しかもそのことを能や花とも連動する茶の湯のスタイルとして創出しようとしたのだから、それこそは生活文化上の大改革でもあったのです。

このことはまた、茶の湯というものが初めて町衆のレベルでもたのしめる遊びだということを告げました。ともかくも「取り合わせ」でも「間に合わせ」でもいいのだから、多少の道具を持っている町衆には、これは自分たちが好きにたのしめる新たな遊びがやってきたようなものだったわけです。

(松岡正剛『日本流』より一部改変)

※1 一休：一三九四年～一四八一年。室町時代の僧。多くの説話のモデルになっている。

※2 サークル：同じ好みや考えをもった人たちの集まり。

※3 狩野亭吉：一八六五年～一九四二年。日本の教育者。夏目漱石と親交があった。

※4 茶数寄：茶の湯を楽しむこと。

※5 アソシエーションやコンビネーション：取り合わせや組み合わせ。

※6 ラディカル：過激なさま。極端なさま。急進的なさま。

問一 ———線①「貧相や粗相」とありますが、茶の湯の場合ではどういうことを言いますか。次の空らんにあてはまるように、本文から二十一字でぬき出し、始めと終わりの三字を答えなさい。

(二十一字) ということ。

問二——線②「こんな不思議な感覚」とありますが、どんな点が不思議であると筆者は考えていますか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 十分な準備ができないと、相手に念を押してまで、間に合わせの道具でもてなそうとしている点。
- イ 上等な道具を準備できないのに、手持ちの道具を用いて、詫びてまで相手をもてなそうとしている点。
- ウ 「侘びる」というのは貧しい様子を指す言葉なのに、上等な道具を用いて相手をもてなそうとしている点。
- エ 茶の湯は日本の伝統文化なのに、そこで中国渡来の唐物などを使って、相手をもてなそうとしている点。
- オ 名品や逸品を用意できるにもかかわらず、あえて貧相な道具を用いて、相手をもてなそうとしている点。

問三——線③「『例』が君臨する」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中国渡来の唐物が、日本の茶器よりも珍重ちんちょうされていたということ。
- イ 名品や逸品を持っていないければ、茶数寄ができないということ。
- ウ 一人一人が創意工夫することを大切にされていくということ。
- エ 何よりも前例が重んじられ、個人の考えが尊重されないとということ。
- オ 道具のレベルよりも「心を尽くす」ことが重んじられていくということ。

問四——線④「破格」とありますが、どういう意味ですか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 実力や才能がある。 イ 実際より評価が低い。 ウ 人間的な魅力みんけんてきがある。
- エ 庶民的な考えしよみんてきを持つ。 オ 基準から外れている。

問五 — 線⑤「こうしたトライアル」とありますが、どういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 唐物の価値を否定し、日本の茶器の価値を重んじるという試み。
- イ 高価な茶器ではなく、手持ちの道具で創意工夫するという試み。
- ウ 公家や武士に加え、一般庶民も茶の湯に参加させるという試み。
- エ 新たな試みを始めること自体に、価値を見出そうとする試み。
- オ 現状を変えるために、次々に伝統を否定していこうとする試み。

問六

＊ に入るもっともふさわしい言葉を、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 見栄つ張り
- イ 適当
- ウ 控えめ
- エ 逆転
- オ がまん

問七

——線⑥「生活文化上の大改革」とありますが、村田珠光の活躍した室町時代中期は、能、茶道、華道、庭園、建築、連歌など多様な芸術が花開いた時代で、それらは次第に庶民にも浸透し、今日まで続く日本的な文化が数多く生み出されました。この時代の文化を八代將軍足利義政の京都の東山山荘を中心に生まれたことから、「東山文化」と言います。次の写真より、「東山文化」にかかわるものを一つ選びなさい。

ア



イ



ウ



エ



オ



カ



問八 村田珠光が茶道において成し遂げたことは、どのようなことですか。ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 一人一人が創意工夫のあるスタイルを作ることが、趣味の世界においては大事なことであり、先例を打ち破る重要性に気付いたこと。
イ 日本人の生活文化上において、茶道をもっとも控えめな素晴らしい文化だと考え、茶道を世界に誇れるように芸術性を高めたこと。
ウ 上等な道具を用意することがなくても、何度も頭を下げることで、その姿が茶道の美しい振る舞いとして、認められるようにしたこと。

エ 高価な道具がなくても、あるもので間に合わせて、それをお詫びしながら用意することで、立派な精神に通じることを発見したこと。
オ 時間がなく、名品と呼ばれる茶器を用意できなくても、あり合わせのもので、臨機応変に対応すれば良いと茶道のルールを変更したこと。

カ それまでは貴族や僧などの身分の高い人々だけが行っていた茶道という趣味を、町人たちにも手の届く楽しみにできるように工夫したこと。

問九 (1) ——線A「村田珠光」は室町時代の「侘び茶」の創始者です。この「侘び茶」は後の安土桃山時代に完成されたと言われます。「侘

び茶」の完成に大きく関係している人物として、ふさわしい人を次の中から一人選び、記号で答えなさい。

ア 雪舟 イ 運慶 ウ 世阿弥 エ 千利休 オ 芭蕉

(2) ——線B「二休」は「一休さん」として、多くの日本人に愛されてきました。その魅力は彼の逸話が多く、「とんち話」として残ってきたところにあります。次のお話は、そんな一休さんの有名なとんちのお話です。(X)(Y)にあてはまることばを自分で考えて答えなさい。

かつて一休のとんちでひどい目に遭った、ある家の主人が、一休に仕返しをしようと思って、和尚様に「一休をお供に、我が家へいらしてください」と言ってきた。そんなことを知らない和尚様は一休を連れて、その主人の家を訪ねた。その家は入り口の門の前に橋のある家で、橋のたもとは、

このはしをわたること、かたくきんぜいなり

と高札が立っていた。その高札を見て困ってしまった和尚様は「この橋を渡らずに中に入る方法はないが、一休どうする」とたずねた。すると一休は「いいえ、このはしをわたること、(X)で書いてあるのですから、(Y)を渡りましょう」と言って、橋を渡ってしまった。

それを見た主人が「禁止の札を見ながら、なぜ橋をお渡りになったのか」ととがめたところ、「いいえ、私たちは端ではありません。(Y)を渡りました。」と言ったので、主人はあきれ果ててしまった。

(『一休ばなし』より)

(3) ——線C「漱石や鷗外」とありますが、「夏目漱石」と「森鷗外」の作品の中からそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鼻 イ 山椒大夫 ウ 注文の多い料理店 エ 二十四の瞳 オ 坊っちゃん

問十 本文で話題になった「茶」について、「先生」と「清さん」と「泉さん」が会話をしています。その会話の様子を見て、後の問いに答えなさい。

清さん みんな、お茶が大好きだよ。そもそもお茶っていつ頃から飲まれているの？

先生 お茶は中国で紀元前二七〇〇年頃に発見されたと言われているんだ。中国では古くからいろいろなお茶の飲み方をしてきたんだよ。

泉さん 日本ではいつからお茶が飲まれるようになったの？

先生 遣唐使が往来していた奈良・平安時代に、^①最澄や^②空海などの留学僧が、唐よりお茶の種子を持ち帰ってきたのが、わが国のお茶の歴史の始まりと言われているよ。当時はお茶は非常に貴重で、上流階級などの限られた人々だけが口にすることができたんだ。ただ遣唐使がなくなってから、お茶はすたれてしまっただ。

清さん それではいつから日本人にお茶が広まったの？

先生 鎌倉時代の僧、榮西が宋から帰国する際に、再び日本にお茶を持ち帰ってきたんだ。その後、京都の明恵上人が榮西からお茶の種をもらい、栽培を始めた。それが今の宇治茶の起源で、その後、全国にお茶が広まったそう。

泉さん 宇治の抹茶は京都のお土産の定番だよ。

清さん お茶について、いろいろと調べてみよう。

(1) — 線①「最澄」、②「空海」、③「栄西」について、それぞれの人物と関係のある用語の組み合わせとしてふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア	最澄	—	延暦寺 ^{えんりゃくじ}	空海	—	真言宗	栄西	—	禅 ^{ぜん}
イ	最澄	—	延暦寺	空海	—	禅	栄西	—	真言宗
ウ	最澄	—	真言宗	空海	—	延暦寺	栄西	—	禅
エ	最澄	—	真言宗	空海	—	禅	栄西	—	延暦寺
オ	最澄	—	禅	空海	—	真言宗	栄西	—	延暦寺
カ	最澄	—	禅	空海	—	延暦寺	栄西	—	真言宗

(2) 泉さんは紅茶の入れ方について、調べました。次のア～オを正しい順番にならびかえなさい。ただし四番目はオが入ります。

ア 温めたポットに人数分の茶葉を入れる。

イ 茶こしでこしながら、温めておいたカップにまわし注ぐ。

ウ 紅茶を入れる前にポットとカップにお湯を注ぎ、全体を温める。

エ 沸騰^{わつとう}したてのお湯をポットに注ぎ、すぐにふたをして茶葉を蒸^むらす。

オ 蒸らしたポットの中をスプーンでひとませする。

(3) 清さんは「茶」に関する様々な資料を集めました。後のアオはそれぞれの資料の説明です。その説明で正しいものを二つ選びなさい。図中の「H」は平成、「R」は令和を表します。

図1

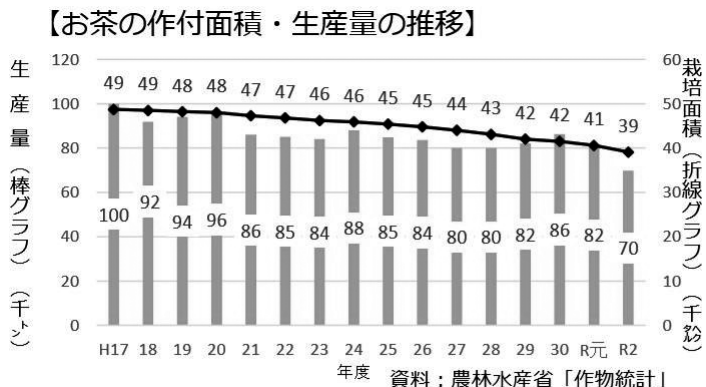


図2

【主産県における農家(注)1戸当たりの栽培面積の推移】(ha)

	静岡	鹿児島	三重	京都	福岡	宮崎	熊本
H17	0.8	2.1	0.9	1.1	0.8	1.7	0.8
H22	1.0	3.0	1.3	1.3	0.9	2.2	1.1
H27	1.2	3.3	1.5	1.5	1.1	2.1	1.1
R2	1.4	3.6	2.0	1.6	1.3	2.0	1.3

資料：農林水産省「農林業センサス」注：H27までは販売農家1戸当たり、R2は個人経営体当たりの栽培面積

図3

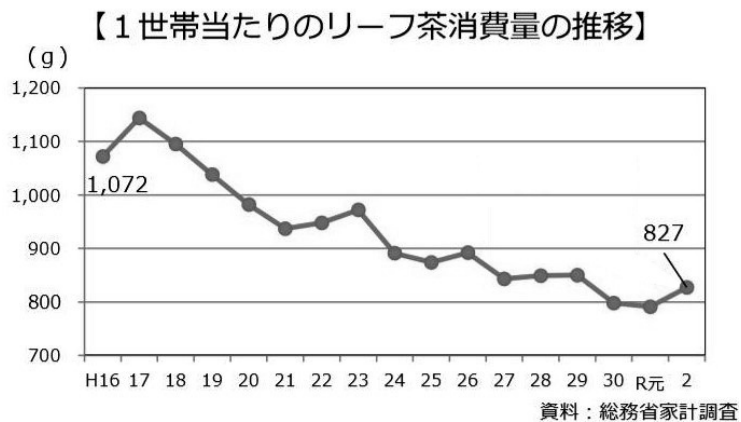


図4

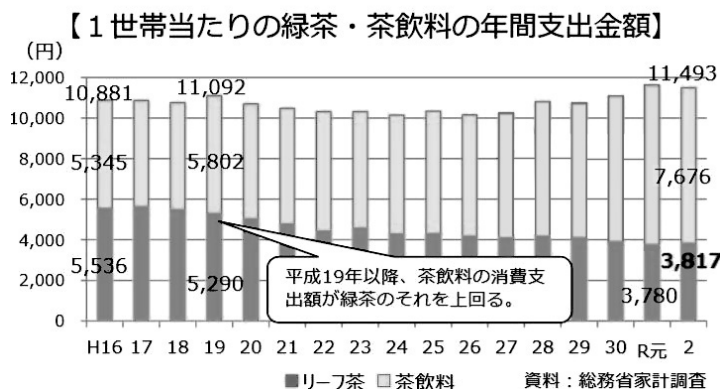
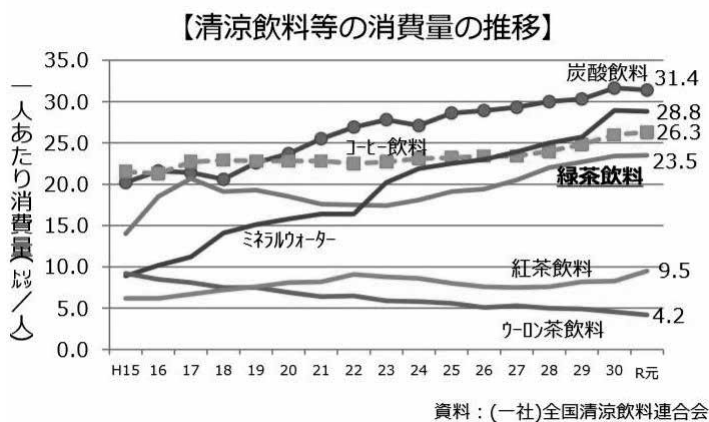


図5



- ア (図1) より作付面積(栽培面積)は緩やかに減少していることがわかる。また生産量は、緑茶飲料需要の増加を受けて平成十七年産では一〇万トンほどだったが、近年は約七〜九万トンあたりで推移している。
- イ (図2) より茶農家一戸当たりの栽培面積は拡大し、特に宮崎県では規模拡大が顕著であることがわかる。
- ウ (図3) より令和二年の緑茶(リーフ茶)の一世帯あたりの消費量は前年より増えていることがわかる。
- エ (図4) より令和二年の緑茶(リーフ茶)と茶飲料の一世帯当たりの年間支出金額は、緑茶・茶飲料ともに前年より減少していることがわかる。
- オ (図5) より令和元年のすべての種類の清涼飲料の消費量は、平成十五年と比べると増加していることがわかる。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

親せきの家に来た洪作は、蘭子とれい子の姉妹と海に出かけることになった。出かける前に、二人はどちらが自転車に乗るかで大げんかをして
いた。

※
兼さんはれい子を荷台へのせると、すぐ自転車を引き出した。洪作は泣いている蘭子の方へ、

「行かないの？」

と声をかけてやった。すると、蘭子は泣くのを中止して濡れた顔のまま、

「行くわよ。次は蘭ちやが乗る番よ。その次はれい子、それからまた蘭ちや、そしてれい子」

そんな憎まれ口を叩いた。洪作は自転車などに乗ってやるものかと思った。洪作は兼さんの引っ張って行く自転車のあとから、蘭子と一緒に行き行った。道の両側には店舗がぎっしり並んでいて、通行人も多かった。洪作はきれいな着物を着た二人の少女と自分が一緒に行動しているという^②ことで、ひどく気恥ずかしいものを感じていた。通行人の視線が悉く自分に向けられているような気がした。半丁程行くと、

「さ、こんどは蘭ちやよ」

と、蘭子が言うと、れい子は素直に自転車から降りた。替わって蘭子が乗った。表通りが終わって、千本浜の入り口に来ると、いつか地面は砂
になっていた。

「さ、こんどはれい子」

そう言って、蘭子は自転車から降りた。するとれい子は、

「こんどは洪ちや」

と言った。このれい子の言葉は洪作には意外だった。

「洪ちや、乗りたくないや」

洪作が言うと、

「遠慮しなくてもいいの。乗りなさい」

れい子はませた口調で言った。

「乗りたくないや」

④ 洪作はれい子の好意を突き離して、前方に見えている松林の方へ駈けて行った。駈けながら、洪作はれい子の好意を受けつけなかったことで、自分の心が痛んでいるのを感じていた。洪作は松林の入り口で立ち停つてうしろを振り返ってみた。蘭子とれい子の駈けて来る姿が見えた。二人が自分のあとを追つて駈けて来るのも、洪作には意外だった。

洪作は二人がやつて来るのを待つて松林の中へはいつて行った。⑤ 松の樹幹と樹幹との間から青い海の一部が見えた。

「うわっ、海が見える！」

洪作は思わず叫んだ。こんな近くから海を見るのは初めてのことだった。豊橋へ行く時、汽車の窓から海を見たが、その時の海と、いま松の樹幹と樹幹との間から顔を覗かしている海とは、全く別物のような気がした。汽車の窓から見た海は一枚の紺の布でも拡げたように静かに見えたが、いま自分の眼の前にある海は、一面に白い波頭を立てて揺れ騒いでいた。

「うわっ、海だ！ うわっ、海だ！」

⑥ 洪作は何回も叫んだ。叫ぶ以外にいま自分の心にたぎり立っているものを表現する適当な言葉を知らなかった。洪作は二人の姉妹には構わず、松林を駈け抜けた。松林がなくなると、砂浜がゆるやかな傾斜をなして、波打際まで続いていた。波打際では白い波が次々に寄せては砕け散っていた。蘭子もれい子もやつて来た。

「うわあつ、うわあつ！」

洪作はやたらに歓声を上げた。蘭子もれい子もさすがにそうした洪作の興奮には驚いたらしく、暫くは呆気にとられて黙っていたが、やがて蘭子が、

「洪ちゃ、田舎には海はないの？」

と訊いた。洪作は自分の名前が、蘭子の口から出たことに驚いた。

「海なんてないや」

洪作が答えると、

「そう。海がないの?! じゃ、あんた海を初めて見たのね」

「うん」

「そう。海を初めて見たの? まあ、驚いた! 海を初めて見たの? そう」

蘭子は感嘆と軽蔑の入り混つた眼で、洪作を見詰ると、

「呆れたわ、田舎の人って」

と言った。洪作はまた蘭子に反感を覚えた。すると、れい子が、

「海を初めて見たのでは、お船に乗ったこともないわね。可哀そうね。あんまり人に言わない方がいいわ。みんなに笑われるわ」

と言った。洪作は折角好意を感じ始めていたのに、れい子にもまた反感を覚えた。うっかり気を許すと、とんでもないことになると思った。洪作は波打際まで行って、そこで裸足になり、波の引いている時、脚を海水に浸してみた。蘭子もれい子も洪作の真似をして同じことをした。

洪作はいつまでも砂浜で遊んでいたかったが、蘭子が帰ろうと言い出して諾かなかつたので、帰ることにした。松林の入り口まで戻ると、兼さんは自転車を松の木にたてかけておいて、その傍に腰を降ろしていた。帰りはまた自転車に乗ることで、蘭子とれい子は言い争った。結局蘭子が押し切った形で先に自転車に乗った。こんどは兼さんは自転車を引っ張って歩かないで、自分もそれにまたがった。そのために自転車はまたたぐ間に、れい子と洪作を置きざりにして遠く隔たって行った。



二人だけになると、れい子は急に溫和しくなった。そしてもう洪作のことを田舎の子だなどとは言わなかった。

「ラムネ飲みたいな。あんたお金ある?」

一丁程歩いて町並みにはいると、れい子は言った。

「ううん」

「一銭も持っていないの?」

「うん」

「可哀かわいそうね。じゃ、あたいが奢おごって上げましょう」

れい子は言った。奢るといふことがいかなることか、洪作には判わからなかつた。れい子は二軒いっけんの駄菓子屋だがしの店先へはいつて行くと、ラムネを二本買って、その中の一本を洪作に渡わたした。

「飲みたくないや」

洪作は言った。喉のどが渴かわいていたので本当はラムネを飲みたかつたが、何となくれい子と二人でこうした場所でラムネを飲むことはいけないことのように思われた。それに奢るといふ言葉にも罪悪じあくの臭においがあつた。

「飲みたくないの？ 変な子！ 飲まなかつたら遊んで上げないから」

れい子は言った。

「じゃ、おれ、飲む」

洪作は言った。先刻もれい子の好意をしりぞけていたので、こんどはそれに応じなければ悪いような気がした。ラムネの壘びんを口につけて、二人はそれを飲んだ。美味うまかつた。

「ミカン水ちょうだい！」

れい子はまたその店の小母おぼさんに言った。そしてミカン水の入つた壘びんを二本受け取ると、その一本を洪作の方に差し出して寄越よこした。洪作はこんどはそれをすぐ口に持つて行つた。どうせもうラムネを飲んでしまつたので、今更いまさらミカン水の方えんりょうを遠慮しても始まらなかつた。ミカン水を飲み終わると、

「落花生らっかせいちょうだい」

れい子は言った。そして三角の袋ぶくろにはいつた落花生を二個受け取ると、こんどもまたその一つを洪作に寄越よこした。二人はそれから落花生を食べながら歩いた。落花生を食べるには何程いかほどの時間もかからなかつた。

「あたい、お菓子買おうと」

れい子は言った。そして先刻よりもっと小さい駄菓子屋にはいつて行つたが、すぐ戻つてくると、

「トコロテンがあるわ。あたひ、トコロテンを食べる。あんたも食べない？」
と言った。

「うん」

洪作は頷いた。トコロテンなどというものは食べたことがなかったので、この際食べてみようかと思った。すると、

「あんた、さきにここで見張っててちょうだい、その間に、あたひが食べる。そしてあたひが食べてから、あんた、食べるの」

れい子は言った。洪作は頷いた。洪作は見張っているように言われたので、れい子が、店先の将凡に腰掛けてトコロテンを食べている間、道路のあちこちに眼を向けていた。何を見張るのかよく判らなかつたが、れい子の父か母の姿でも見えたら、すぐれい子に合図してやらなければならぬと思った。

(井上靖『しろばんば』より一部改変)

※ 兼さん：蘭子とれい子の家に住んでいる丁稚（商家に住みこんで、雑用や使い走りをする人）。

問一——線①「洪作は自転車などに乗ってやるものかと思った」とありますが、それはなぜですか。この時の洪作の気持ちとしてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 気の強い蘭子がかくやしがつて泣いていたので、自転車を追いかけるつもりがないのかどうか、本心がわからなかつたから。
- イ れい子の気の強さに圧倒されていた上に、さらに蘭子の自分のことを見下したような態度にがまんがでなかつたから。
- ウ 泣いている蘭子を気の毒に思つて声をかけてやったのに、自分はそのにいないかのような口ぶりで、意地悪く感じたから。
- エ 妹のれい子に押しつけられた姉の蘭子を見て、年下にやられるというような無様なさまに自分はなりたくなかつたから。
- オ 兼さんの引張って行く自転車を後ろから見ている方が、二人の姉妹に関わらなくてすむので、気持ちが悪かつたから。

問二——線②「ひどく気恥きはずかしいものを感じていた」とありますが、それはどういうことですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 二人がとても目立つ愛らしい姉妹だったので、一緒いっしょにいると通行人からあやしい目で見られるのではないかと思ったということ。
イ 田舎いなかじみた自分の服装は二人に比べてあまりにも貧相だったので、自分自身がひどくみすばらしく感じてしまったということ。
ウ 二人の姉妹の後ろから自分がついていくのは召使めしやいのようで、周囲からみともない子だ、と見なされるかもしれないということ。
エ 道の両側には、その先もずっと長く店舗が並んでおり、田舎と違って大勢の人でにぎわっていたので、ドキドキしていたということ。
オ 美しい着物を着た女の子たちと一緒にいるだけで、自分がきわだち、周囲の人々から注目されているように思ったということ。

問三——線③「洪作には意外だった」とありますが、それはなぜですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 姉妹はけんかをよくしたが、性格的な意地の悪さは同じだったから。
イ 二人の姉妹から、自分は相手にされていらないと思っていたから。
ウ れい子から自分と蘭子は置いてけぼりを食らっていたから。
エ れい子が自分より優位に立っていることを見せつけてきたから。
オ 砂地になって自転車が乗りづらくなったことに気づかなかったから。

問四——線④「自分の心が痛んでいるのを感じていた」とありますが、この心の痛みとはどのようなものですか。その説明としてもっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 命令口調ではあったものの、自分にも自転車へ乗ってもいいと言ってくれた言葉に反発し、人の好意を素直に受け取らなかったことへの後悔。

イ 二人への反発から、自転車など死んでも乗ってやるものかと思ったが、それは自分の心のせまさであり、視野をせばめることだという後悔。

ウ れい子が本当は自分のことが好きなのかもしれないということに気づいていながら、その気持ちをむだにするようなことを言ってしまったことへの反省。

エ れい子が蘭子の気持ちを逆なでするために、わざと自分によくしようとしていると思ったことは、間違いだったという反省。

オ 案内してもらっている身でありながら、こんどは二人を無視して自分が先に駆けてきてしまい、二人に恥をかかせてしまったことへの申し訳^{わけ}なさ。

問五——線⑤「松の樹幹と樹幹との間から青い海の一部が見えた」とありますが、このときの海と以前汽車の中から見た海とでは、見え方にどのような違いがありますか。次の《解説文》のA、Bには本文の言葉をぬき出し、Cには、自分でふさわしい言葉を考え、それぞれ指定された文字数で答えなさい。

《解説文》 以前見た海は（ A 〓十一字 ）ように静止して見えたが、いま樹幹と樹幹の間から見える海は、色も白く、

（ B 〓五字 ）いて、まるで（ C 〓五字以内 ）ように見えたということ。

問六 — 線⑥「いま自分の心にたぎり立っているもの」とありますが、それはどこから来たものですか。もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 海というものを生まれて初めて目の前で見たという興奮。

イ 思い描いていた海と実際は異なっていたという恐怖。

ウ 汽車の窓から見た海と全く違うことによる衝撃。

エ 現実には海があるということを知って認識した喜び。

オ あこがれの海を努力して見ることができたという感動。

問七 — 線⑦「感嘆と軽蔑の入り混った眼」とありますが、このとき蘭子はどのような気持ちでしたか。自分の言葉で説明しなさい。

問八 ☆より後の洪作とれい子の様子を説明したものととして、もっともふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア れい子は洪作に奢り、洪作より優位に立とうとした。洪作はそれに抵抗したが、れい子を拒んでばかりであったことに気づき、れい子の好意に応えようと誠実な態度をとるようになった。

イ れい子は洪作に奢り、一緒に飲み食いしようとした。洪作は初め反発したが、飲んだり食べたりするうちに距離が縮まり、素直にれい子に味方するまでになった。

ウ れい子は洪作に奢り、親しく会話をしようとした。洪作は初め不信感を抱いたが、美味しいものをれい子に買ってもらうことで、れい子にすっかり好意を持つようになった。

エ れい子は洪作に奢り、禁止されている寄り道に誘おうとした。洪作はそれに罪悪感を抱いたが、飲み食いする楽しさに心をうばわれ、自ら積極的に行動するようになった。

オ れい子は洪作に奢り、洪作に自分の言うことを聞かせようとした。洪作はそれにとまどったが、否定するとれい子が悲しむと思い、彼女の言葉に従うようになった。

問九 主人公の洪作の人物説明として、ふさわしいものを次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 口にしたことのないみかん水やトコロテンに挑戦し、見たことがない海に走りよるような、度胸のある少年である。
- イ 初めて近くで見る海に対して、人目を気にせず歓声を上げて感動を表すような、素朴な少年である。
- ウ 蘭子たちに田舎者だと一度笑われると、どんなに優しくされても反感を持ち続けるような、プライドの高い少年である。
- エ 蘭子が泣いている時に、れい子を気にして無視したりせず、優しく声をかけるような、礼儀正しい少年である。
- オ 禁止されていると分かっているにもかかわらず、後先考えずにラムネや落花生を飲み食いするような、お調子者の少年である。
- カ 自転車や飲み食いなど、やりたいと思っただけには誘いを受け入れられない、意地っ張りな少年である。

〔三〕

(1)

次の①から③の熟語と「似た意味」を持つ語を考えたとき、それぞれ□の中に入る漢字を書きなさい。

- ① 広告 □ 伝
- ② 不安 □ 心 □
- ③ 短所 □ 点

(2)

次の——線部のカタカナを漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① エンソウ会に行く。
- ② 庭でカ|つていた犬。
- ③ ドウゾウをた|てる。
- ④ ロウホウを待|つ。
- ⑤ センレン|された洋服。
- ⑥ 書類とシヨウゴウ|する。
- ⑦ 素直な心|を育む。
- ⑧ オリンピック|選手の勇姿。

